

シンポジウム 5

「日本の災害獣医療の今後を考える」

7月20日 14:00~17:00 /会場：ラウンジ



座長 佐伯 潤氏

阪神・淡路大震災から 20 年となる今年は、アメリカ南東部を襲ったハリケーン・カトリーナの被害から 10 年の年となります。日本でも、ニューオーリンズの街が水没した映像が報道されましたので、この災害を記憶している方も多くおられると思いますが、人と共に多くの動物も被災しました。



ジョン・マディガン氏

まず始めに、アメリカの多くの災害現場で災害獣医療の経験を持つカリフォルニア大学デービス校教授のマディガン氏から、同校の獣医緊急対応チーム (VERT) の活動内容が紹介されました。VERT は主に災害時における動物への対応およびトレーニングを行う組織で、UC デービスの教員や学生によるボランティアによって構成されています。



田中亜紀氏

マディガン氏の報告では、25% (日本では 21%) の飼い主がペットを残して避難することを拒否して現場に残り、一旦はペットを残してきた人の 50~70% (日本では 80%) が危険の残る被災地に戻ろうとしたという実態が示され、田中氏からは日本国内でも同様の認識があることが示されました。このことから、国や災害の種類の違いはあるものの、災害に見舞われる前に、動物と共に避難する体勢の構築が、その後の人と動物双方の安全にとって効果的で効果的であり、適切な準備と協調体制が人と動物と地域の安全を守ることに繋がるのが分かります。

また田中氏からは、実際の避難所や救護施設での動物の群管理や危機管理の現状が伝えられ、災害時に起こる問題の多くは、実は平常時から抱えている問題が露呈するケースが多く、もともと飼い主のいない猫などが被災地のシェルターに多数保護されるケースも見受けられるそうです。これらのことから、災害に見舞われる前に、地域ぐるみで解決しておくべき課題が多数あることが理解できます。

お二人の発表後に、マディガン氏の片腕でもあるパトリス・アンドラーデ氏も参加し会場からの質問にお応え頂きました。アメリカの災害獣医療のエキスパートであるお二人がこうして日本で一緒に登壇することはとても貴重な機会です。会場からは、災害現場でのリーダーシップの在り方についての質問があり、マディガン氏から丁寧な説明がありました。人生の基盤が崩壊するような非常時に、

動物の救助を行なうことに対する住民の理解やまだ十分に体勢が整っていない日本国内のこれからの課題を見つめ直す良い機会となりました。

オーラルセッション 4

「その他」

7月20日 14:00~17:00 /会場：セミナー室



小関 隆氏

このセッションでは、セッション 1~3 のいずれにも分類されない内容の発表が行なわれました。人と動物の関係は、これらの特定の分野に分類されるものではなく、あらゆる分野で繋がりがあっても過言ではありません。



中塚圭子氏

まずはじめに、93 の獣医師団体、15 万 8 千人の獣医師で構成される世界小動物獣医師会 (WSAVA) の活動内容について、アジア地区の代表大使である小関氏から報告が行なわれました。WSAVA は、毎年異なる地域で開催される世界大会で最新の医療知識を学び、さまざまなアニマルヘルスのトピックについて討論が行なわれている世界規模の獣医師の共同体です。ここでは、さまざまな Pain (痛み) を緩和するための「グローバル疼痛ガイドライン」と、人、動物、環境に関する専門家が協力して取り組みを行なう「ワンヘルス」について、狂犬病を例にあげながら報告が行われました。



佐藤衆介氏



牧田明美氏

次に、環境人間学博士の中塚氏のグループから、獣医学や動物行動学に根差した欧米的なしつけとは別に、日本の暮らしや日本人の動物感に合った日本流の犬との付き合い方を、環境人間学の観点から提唱されました。「犬は人間が矯正することができない場面もあると認識する」「犬の個性を尊重し、あるがままの姿が活かされる」という考え方は、逆に飼い主の安心感に繋がるという報告です。

そして最後に、帝京科学大学の佐藤氏より東日本大震災および福島第一原発事故による警戒区域に残された牛についての報告が行われました。これらの地域では複合経営の農家が多く、家畜は少数飼育であるため飼育者との心理的な結びつきが強い地域でもあるため、そうした視点で農家に保護されている牛の活用を通して、未来につなぐ復興について意見を述べられました。